

DXで物流はどう変わる？

第6回 DXを活用した中継輸送で ビジネスチャンスをつかむ



2024年問題の有力な対策として、中継輸送の推進が目まぐるしく注目されています。しかし中継輸送の導入にあたっては、帰り荷の確保などを徹底させたり、ドライバー管理や車両管理を行わなければなりません。さらに、手作業で複雑化する業務を処理すればコスト負担が大きくなります。

そこで中継輸送を円滑に進めていくための鍵となるのが、クラウド型のデジタルプラットフォームの活用などによるDXの導入です。今回は中継輸送をDXで乗り切り、ビジネスチャンスにつなげていく道筋を解説します。

2024年を目前に、注目される中継輸送の推進

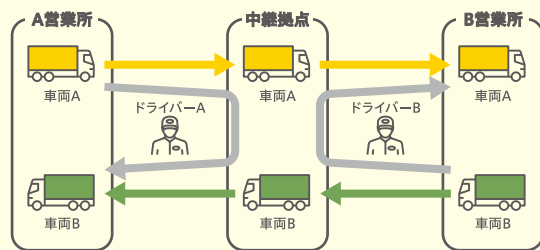
2024年4月1日から始まるトラックドライバーの時間外労働の上限規制。それに伴い、短時間運転(150~200km以内)での輸配送ネットワークの再構築を進め、複数都市圏へのアクセスを強化する動きが加速しています。そうした潮流において、今注目されているのが「中継輸送の推進」です。

中継輸送とは、一連の輸送プロセスを1人のトラックドライバーが担当するのではなく、複数のトラックドライバーによるリレー方式での輸送です。そして中継輸送には基本的に次の3つの方式が挙げられます。

●中継輸送の代表的な3つの方式

①トラックドライバー交代方式

中継拠点でトラックと積載貨物はそのまま、トラックドライバーのみが交代する方式。「自分のトラックを他のドライバーが使う」ということに慣れていく必要があります。



②トレーラー・トラクター交換方式

トラクターを入れ替える方式。けん引免許を持つトラックドライバーが必要となりますが、スワップボデー(架装車両)を導入すればけん引免許がなくても構いません。

③貨物積み替え方式

中継拠点で貨物を積み替える方式。トラックドライバーはトラックを乗り換えることはありませんが、手荷役では時間がかかるので、貨物をパレット単位にまとめる必要があります。

DXの導入で中継輸送を円滑化

2024年問題解決の鍵を握る中継輸送ですが、円滑な導入には拠点構築などのインフラ整備だけでは対応できません。クラウド型のデジタルプラットフォームの活用といった、DXとのリンクが不可欠です。そこで一例として、スムーズな中継輸送につなげるポイントを整理すると次のようになります。

●DXを活用したスムーズな中継輸送を実現するポイント

①中継輸送プロセスを標準化

- ・運行ルートや荷役作業について、標準的な設定、手順、段取りなどを取り決める。
- ・物流事業者と荷主企業間とのデータ共有を行う。

②KPI(目標値)※の設定

※KPI: Key Performance Indicator(重要業績評価指標)。最終的な目標達成に必要な業務プロセスを、どの程度達成できたかを測る指標。

- ・待機時間や積載率、実働率などの適正化について現状値を分析したうえで、KPIを設定する。

③動態管理プラットフォームの活用

- ・拘束時間内で最大限に労働できるよう、クラウド型の動態管理プラットフォームを活用し、位置情報、到着時間、待機情報などを把握する。

④中継輸送方式に合わせた現場研修の実施

- ・スワップボデーの装着スキルアップ(トレーラー・トラクター交換方式の場合)や、荷扱い情報の引き継ぎを円滑に行えるよう研修を実施する。

DX型中継輸送はビジネスチャンスを創出

DXと中継輸送とのリンクは、今後さらに進んでいくでしょう。そして、そのメリットは次の2点になります。

- ・物流事業者間のネットワーク強化
- ・デジタルプラットフォームの構築で、物流事業者と荷主企業とが横串を通して情報を共有

これらは、今後低下することが懸念されるトラック輸送能力を維持しつつ、荷主企業の要求にきめ細かく対応できることを意味しています。ピンチは取り組み次第で大きなビジネスチャンスに変えられる、という発想が2024年問題を乗り越える上で大切になってくるのです。

鈴木 邦成 (すずき くにのり)

物流エコノミスト、日本大学教授(在庫・物流管理など担当)、博士(工学)(日本大学)、早稲田大学大学院修士課程修了。日本ロジスティクスシステム学会理事、日本SCM協会専務理事、日本卸売学会理事。専門は物流・ロジスティクス工学。主な著書に『物流DXネットワーク』(NTT出版)、『入門 物流(倉庫)作業の標準化』(日刊工業新聞社)。

